

学位請求論文審査報告書

氏 名 池 田 向 一

論文題目 大悲の浄土—鈴木大拙の浄土教観—

審査委員 主査 大谷大学教授 井 上 尚 実
Ph. D. [University of California]

副査 大谷大学准教授 Michael J. Conway
博士（文学）[大谷大学]

副査 大谷大学名誉教授 加 来 雄 之

副査 南山大学教授 守 屋 友 江
博士（国際学）[明治学院大学]

I. 論文内容の要旨

本論文は、大谷大学教授として長年にわたり大乘仏教研究とその欧米への普及につとめた世界的仏教学者 D. T. Suzuki 鈴木大拙（1870～1966）の浄土教観について「即非」・「妙用」・「大悲」という三つの観点から考察し、その意義を明らかにした真宗学の論考である。従来、鈴木大拙の浄土教理解は「禅から見た真宗」と見做される傾向があり、その理解について一定の共感は示されつつも、それを積極的に真宗教学の中に位置づけようとする試みはなかった。これに対して本論文は、鈴木大拙の浄土教観を正面から受けとめ、真宗教学の立場から積極的に応答する形で論じられており、特に現代の真宗教学において主要なテーマとなっている還相回向論について、「即非」・「妙用」・「大悲」という観点で特徴づけられる鈴木大拙の浄土教観が開く視座の重要性を提示している。

論文全体の構成は以下の通りである。

序章

第一節 本論稿の目的と考究の手法

第二節 鈴木大拙の浄土教観の研究の意義

第三節 鈴木大拙の生涯と浄土教との関わり

第一章 即非の浄土

第一節 矛盾の立脚地

第二節 円環する浄土—『浄土系思想論』における鈴木大拙の浄土教観

第三節 『浄土論註』における無功用行と鈴木大拙

第二章 妙用の浄土

第一節 浄土のダイナミズム

- 第二節 名号論
- 第三節 摂化する名号—『浄土論註』と鈴木大拙
- 第三章 大悲の浄土
 - 第一節 包摂する浄土—『日本的靈性』を中心として—
 - 第二節 一人の自覚—靈性の自覚的顯現
 - 第三節 大人の子供—妙好人浅原才市と鈴木大拙
- 結章
 - 第一節 鈴木大拙の浄土教観が開く真宗教学の視座—その還相回向観を巡って—
 - 第二節 本論稿の総括と今後の課題
 - 第三節 結語

序章では、この論文の目的と方法および考察の範囲が明確に規定されている。本論の目的は真宗教学の中に鈴木大拙の浄土教観を位置付け、それに対する積極的な応答を試みることである。広範な鈴木 of 著作の中から浄土教（真宗）に関する和文英文の著作に絞って考察の対象とすることが最初に述べられている。「即非の浄土」・「妙用の浄土」・「大悲の浄土」という三章の構成は、鈴木大拙の浄土教観を真宗教学の中に位置付けて応答するのに適した切り口として設定されている。

第一章「即非の浄土」は、鈴木大拙の思想の根幹をなす「即非の論理」を概観し、その論理が鈴木 of 浄土教思想の場合も根幹になっていることを確認している。「即非」とは二つ立場が対立しながらそのまま相即していることを説く矛盾の論理であるが、鈴木にとって浄土教における娑婆と浄土は、矛盾対立しながら円環する「即非」の関係である。第二節では、その特異な関係を昭和 17 年（1942）に出版された『浄土系思想論』を中心に論じている。また第三節では鈴木と『浄土論註』との関係を鈴木の「無功用行・利他行」に関する見解を中心に考察している。

第二章「妙用の浄土」では、前章で確認した「即非の論理」が「働き（妙用）の論理」であり、また「創造の論理」としての側面を持つことが論じられている。ダイナミックで創造的な浄土の「妙用」について鈴木大拙が語る時、それは「名号」に結実するので、第二節は名号論に焦点を当てている。「成る名号」という大拙独自の名号理解については、これまで一遍（1239～1289）に近いという指摘がなされてきた。しかし本章第三節は、昭和 16 年（1941）から 17 年（1942）にかけて大拙が積極的に受容した曇鸞『浄土論註』の影響に注目し、『浄土論註』浄入願心章に出てくる「一法句」とは本願の名号であるという解釈とのつながりを重視している。

第三章「大悲の浄土」は、『日本的靈性』などの諸著作に現れる「靈性」「大地性」という概念に着目し、阿弥陀仏の浄土がすべての衆生を包摂（摂取）する働きについて論じている。さらにこの包摂的論理と西田幾多郎（1870～1945）の「場所の論理」との関係についても言及している。阿弥陀仏と衆生の包摂関係は「否定を契機とした相互包摂」という概念で論じられるが、鈴木にとってそれが実現している最も具体的な例は妙好人浅原才市（1850～1932）である。そこで最後の第三節では鈴木大拙による才市の詩の解釈を通して、「包摂する大悲の浄土」について考察している。

結章は、鈴木大拙の浄土教観が真宗教学においてどのような視座を開くのかというこ

とに関して、還相回向の解釈の問題を中心に論じている。長谷正當が『本願とは何か—親鸞の捉えた仏教—』（2015）の中で取りあげた①回向を衆生の相として捉える見解と②それを批判した寺川俊昭（1928～2021）の二種回向理解の統合の試みについて、「円環」や「包摂」の働きを根底とする鈴木浄土教観を念頭に置くことによって①と②を統合する視座が開けることを確かめている。論文全体の結びには「大拙の根本関心を十分に表現し得るのは〔禅よりも〕むしろ浄土教言説の方ではなかったか」というようにこの研究を通した著者の確信が述べられている。

II. 論文審査結果の要旨

本論文は、鈴木大拙の浄土教観について「即非」・「妙用」・「大悲」という三つの観点から考察し、真宗教学の中に的確に位置付け、それが有する重要な意義を確かめている。博士論文として第一に評価できることは、英訳『教行信証』（*Shinran's Kyōgyōshinshō: The Collection of Passages Expounding the True Teaching, Living, Faith, and Realizing of the Pure Land*, Oxford University Press, 2012）、『英文著作集第2巻：浄土』（*Selected Works of D. T. Suzuki, Volume II: Pure Land*. Ed. James C. Dobbins. University of California Press, 2015）をはじめ鈴木大拙による英文和文の真宗関係著作を漏れなく参照し、独自の視点から丁寧に考察していることである。著者が学部卒業論文の段階から大学院博士後期課程にいたるまで、長年にわたり継続してきた専門的研究をまとめたオリジナルな論考といえる。これまで鈴木大拙の浄土系思想は「禅から見た真宗」と見做され、大拙自身の思想展開の中でも傍流という受けとめが一般的であったが、この論文はそうした定説的な見方を覆すだけの説得力をもち、新たな研究の方向性を提示している。

真宗学の専門的研究は『教行信証』や『浄土論註』などの漢文聖教を読み解くことが中心になるため、ともすると難解な教説の同語反復的な繰り返しに陥る危険があるが、本論はそこに「鈴木大拙の浄土教観」という適切な補助線を入れることにより、大乘仏教・普遍宗教としての浄土真宗の特徴を明瞭にできる視座を確保している。特に第三章において「靈性」「大地性」という概念に着目して「包摂する浄土」を論じる際には、西田幾多郎の「場所的論理と宗教的世界観」への影響についても考察に含め、それに関する最新の研究も参照して論述していることは評価できる。

鈴木大拙の浄土教観を真宗教学の中に位置付けるために著者が設定した「即非の浄土」・「妙用の浄土」・「大悲の浄土」という三つの切り口は非常に斬新であるが、「大乘のなかの至極」として親鸞が明らかにした浄土真宗の「空から慈悲へ」という基本的な流れに適合しており、この三つの切り口に沿った論の展開は理に適った説得力をもつ。結章の第一節に「鈴木大拙の浄土教観が開く真宗教学の視座—その還相回向観を巡って—」を加えたことは、現代の真宗教学において重要な論点である還相回向について新たな解釈の可能性を開いた点で高く評価できる。

本論文において課題として残されている点や不明瞭な点については、口述試問を通して確認することができた。以下に主な点について記す。

- 1) 鈴木大拙の浄土教観について考察するとき、その歴史的な脈をもう少し重視すべきである。本論文では1941年から1942年にかけて曇鸞の『浄土論註』を読んで積極

的に受容したことが『浄土系思想論』（1942）や『日本的靈性』（1944）に現れる特徴的な浄土教観の形成につながったと論じているが、太平洋戦争中のこの時期に大拙を『浄土論註』読解へと向かわせる契機は何だったのか。1941年から1942年というのは、曾我量深と金子大栄が大谷大学教授として復職し、大谷派教学の中心を担うようになっていく時期と重なっているが、それは単なる偶然なのであろうか。

James C. Dobbins による最新の研究（“D. T. Suzuki and the Ōtani School of Seishinshugi,” in *Adding Flesh to Bones: Kiyozawa Manshi's Seishinshugi in Modern Japanese Buddhist Thought*. Eds. Mark L. Blum and Michael Conway. University of Hawai'i Press, 2022）によれば、日記など残されている資料からは大拙と曾我や金子との直接的な影響関係は確認できないようであるが、それでもなお、大拙を『浄土論註』に導いた歴史的な背景について、状況証拠も含めて可能な限り掘り下げた推察を提示すべきであろう。

- 2) 鈴木大拙による曇鸞『浄土論註』の読解を、大拙の浄土教観の根底をなすものとして論じるとき、その論述は解釈のレベルに関する方法論的な問題を内包している。第二章第三節には、『浄土論註』浄入願心章に出てくる「一法句」は「南無阿弥陀仏」の名号であることが論じられているが、それは著者による独自の解釈なのか、大拙の自由闊達な受けとめなのか。親鸞は『浄土論註』をそのように読んでいるのか。曇鸞が実際にそのように意図して『浄土論』を注釈しているのか。この箇所の論述には、解釈の主体について読み手に困惑を与えるところがある。著者はこうした「解釈学的循環」の問題について十分意識しているが、真宗教学の中に鈴木大拙の浄土教観を位置付けて応答するという本論文の方法論に関わる重要な問題なので、さらに慎重な配慮が求められる。
- 3) 鈴木大拙の英文の著作を参照するとき、本文中には著者自身による和訳を引用し、注に英文原文を挙げる形をとっている。和訳は丁寧で読みやすい日本語になっているが、『鈴木大拙全集』（岩波書店）の中に既存の訳が入っている場合には、それを使う形にしてもいいのではないか。

本論文は上記のようないくつかの課題を残してはいるが、総合的に見て完成度の高い優れた学術論文であり、鈴木大拙の浄土教観について定説の見直しを迫る新たな知見を提示している。真宗学および哲学などの関係諸分野に関する著者の学識については、口述試問の質疑応答を通して十分に確かめることができた。

審査に必要とされる最終試験については、審査員全員により2022年7月29日に試問を行った。その結果、審査員一同一致して、池田向一に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。